

社会人研究者から社会人研究者へ ささやかなメッセージ

櫻井 善行

はじめに

本稿は、社会人として研究を志そうとする人への、私の経験からのささやかなメッセージである。私が社会人研究のモットーである「働き、学び、研究」(働・学・研)という課題を抱え、研究を志したのは社会人大学院に入学した1990年代で40代前半であった。だがその環境は、私が研究を進めて行くには決して十分ではなかった。この時期は時代の転換点であり、施設的にも社会人研究者を育てていく体制は不十分で、とまどうことが多かった。特に博士後期課程に進学してからその感を強くした。

それでも当時の私が研究を前に進めていくきっかけになったのは、偶然にも大学の資料室で見つけた基礎経済科学研究所発行の「経済科学通信」であった。この研究雑誌と基礎研との出会いと関わりが私の研究を前に進めていくことになった。だがその後も幾度となく困難に直面し、ある時は逡巡し、ある時には逃げだそうとしたこともあった。

本稿は、私の社会人研究者としての歩み、とくに博士(経営学)を授与され単著書出版に至るまでの自らの体験、を簡単にまとめたものである。これから研究を志そうとする人に、私の拙稿が少しでも役立つことがあればと思い、私の経験と思いの一端を紹介したい。

1 人との出会い

2019年3月、博士(経営学)を名古屋学院大学から授与された。現役時代を終えて8年近い歳月が経つ。私の腹が固まるのは、現役をリタイアして5年を経た頃で、博士論文の作成・完成まで3年の歳月がかかった。それを可能にした決定的な事は、基礎研を通じて知り得た十名直喜教授をはじめ(外部にも開かれた)博士課程十名ゼミに結集する仲間の存在であった。彼らが同じ社会人として研究に取り組む姿は、私に知的好奇心を掻きたたせ、研究を進めていくことを促した。研究活動に限らず、人生の中で多くの人と出会ったことが、私の生き様に有形無形の影響を与え、私が視野を広げる契機となった。こうしたことが、私とは異なる立場からの「異見」や「異論」にこそ、目を向け、耳を傾けることが必要で、自らの発達や成長を促し前に進むことが出来ることに気づかせてくれた。

日々出会う人々との交流と実践の体験こそ、研究活動を前に進める原動力であり、同じ立ち位置の人だけでなく、正反対の思考様式の人との交流も研究にとってかけがえのない存在である。むしろそうした人の存在が、己の学問に対する緊張感をもたらし、真摯に物事を見つめ、分析する契機となったと今では考えている。

2 研究活動でのとまどい

私の研究活動は、そもそも研究とはなんぞやという命題からはじまった。研究とは、広辞苑によれば、「物事を学問的に深く調べたり考えたりして、事実や理論を明らかにすること。

また、その内容」をいう。研究によって書き上げたものが論文であり、学習勉強をまとめたものはレポート・作文である。もちろん論文作成は一朝一夕で完成するものではない。自らの研究成果をノートやレポートとしてまとめていくのは当然である。その延長上に体系化され洗練化され、一つのまとまった論文にまで行き着くのだが、根底には質的な差異がある。論文は自身の問題設定を掘り下げた研究成果の表現である。それは単に数量的に多い少ないことではなく、独創性や論理性など質に関わる事こそ重要であり、量的差異とは異次元である。これはすぐに腑に落ちたわけではない。納得するまで、この至極簡単な命題に到達するまで、しばしの時間を要した。

さらに加えて、誤解を恐れずに書かなければ、研究には「独断」と「偏見」が不可欠である。当たり障りのない通説に依拠すれば、それは模倣と大差がない。論文では、「仮説」を設定し、それが真理であるかどうかを検証していく作業が必要とされるが、その手法はさまざまな方法が活用されよう。研究という行為は、崇高な視点からの仮説の検証とオリジナリティを伴う分析が必要とされる。この至極当然の命題にいきつくのに、私が実に多くの歳月を要したのは、長く社会人としての常識に浸り過ぎていたからである。前例を踏襲することと先行研究を検証することとは天と地ほどの隔りがある。

恥ずかしい話だが、作文やレポートと論文は、同じ文書でも水準が全く異なる事に気づかされたのも、私の知的好奇心をそそる結果となった。研究に行き詰まれば、今一度、なぜ研究を志すに至ったのか、その初心に戻る事が必要である。様々な人との出会いは、研究に向かう気持ちを大きくさせた。

3 社会人研究者とは

社会人研究者の使命は、働き学び研究する（「働・学・研」）という課題を統合することである。研究も場合によっては俗世界を眺めながら順次真理に近づく手法も必要である。社会人研究者の優位性は、実社会での経験による豊富な事例があり、そこから高い水準に昇華させていくことが可能である。可能であるからといって、それですべて解決するわけではない。そこからの道のりは長く険しいものになることも予想される。

社会人研究者ならではの優位性もある。それは、身近に多くの具体的な事例があり、多くの人と出会い、様々な異見と遭遇し、関わることができるからである。そこから一步踏み込むことができれば、目的にたどりつくための道筋が見えてくる。だがその一步を踏み出すことが決して容易ではないこともままある。

社会人研究者は、高尚な理論から現実を下りることよりも、現実の社会現象を正確に捉えて、それを高い次元のものに向かわせていくことに意義がある。これはロジックの構築のために象牙の塔のような異空間の中で業績を生み出すことを否定するものではない。研究の素材は、我々の周囲にはいくらでもあり、それを活用していく視点も必要である。

また何よりも、これまでの知的作業の営みを、1つのコンセプトとしてまとめることの重要性を痛感した。1つ1つの業績は、いずれもパーツにすぎない。それらをどう組み合わせ

て体系化するか、統合するかである。これも博論作成の過程で私は痛感した。

4 オリジナリティとワンメッセージ

研究の初期の段階で陥りがちなのは、研究対象への絞り込みが不十分なため、あれもこれもという発想になり、焦点が絞り切れなくなることである。実際に私も、研究テーマ設定の段階でその壁に遭遇した。何回となく右往左往の結果、テーマと調査が膨大なものになり收拾がつかなくなったが、その壁を越えられたのは、人からのサポートであった。

論文の作成から完成まで、私が痛感したのは、固定的な価値観を超えた柔軟な思考様式が必要とされたことである。現代社会の変化は、本質の理解は大切だが、物事を一面的に見るのではなく、立体的複眼的に考察することで、古い思考方式を乗り越えることも可能だと考えるようになった。これも大きかった。

物事の本質に迫るために、自分の設定しようとするテーマを単純化し、何が言いたいのかワンメッセージにすることが必要である。そうすれば、そのメッセージがオリジナリティを伴うものであるかどうかも見えてくる。それ故、文章の技も重要であり、洗練化、校正、推敲などは不可欠だが、文章を外面だけで装飾し、取り繕う手法は御法度である。あくまでも自分が論文の中で何を語りたいのか、そのための中身を伴ったワンメッセージの発信が重要である。これができれば、量から質への転化は可能となる。私にはこうした経緯が、これまで私が持っていた「企業社会論」という漠然としたイメージから、「大企業トヨタと企業福祉」というテーマそのものが発展し、絞りこみに至った。

まとめにかえて

社会人研究者の優位性をあげるとしたら、現場密着である。現場での日々の実践が貴重な資料を提供してくれるが、社会人研究者の研究業績が日の目を見ないのは、アカデミックの側からの通俗化への警戒心だろう。学問のハードルは高いが、通俗的な世界に足をどっぷりとつけていると、満足してしまうことがある。それを研究の高い水準にまで導いてくれる助言者がいなければ、研究業績として表舞台に出ることもないだろう。

現場感覚は重要だが、それを高い水準に導くことなく埋没すれば俗流的立場に墮してしまう。アカデミズムを志す者にとって、プラグマティズムそのものは否定すべきではないが、重要なのは、実用的なものを学術的なものに高める努力の継続である。

十名ゼミでの3年間の教授からの助言と研究交流でやっと学位取得のめどがついても、論文審査という最後のハードルを越えなければならなかった。現在の博士号の審査は課程博士が主流になり、論文博士は困難だと聞く。これも同じ境遇の先輩の社会人研究者からのアドバイスから学ぶことが大であった。論文審査を通過し、最後の仕上げ作業は単著の発行だった。これもしばしの日時が必要であった。こうして一つの目標にたどり着いた。困難であっても、「働き、学び、研究」(働・学・研)という課題を抱え、1つ1つの作業を積み重ね、社会人研究者の使命を貫く仲間が出てくることを期待してやまない。

